竹久夢二の人形制作活動

王文萱

論　文　要　約

夢二は生涯をかけて「人形」というモチーフに執着した。彼の文学や絵画作品にしばしば「人形」に関する内容が出ているだけでなく、彼は人形制作活動にも着手した。本論文でその原因を探るため、最後にたどり着いたのは、夢二の幼年時代における人形浄瑠璃との深い関わりである。夢二が 16 歳まで過ごした故郷、岡山県邑久郡本庄村では、「面浄瑠璃」という人形浄瑠璃から転化した芝居と阿波や淡路の人形芝居がはやっていた。また、当時の竹久家は、「面浄瑠璃」を演出する場所だと推測される。もちろん、これだけで夢二が人形に執着することを解釈するには、まだ不十分であるが、小さい頃から、阿波や淡路の人形芝居や、人形の振りで演じられた面浄瑠璃に親しんできた夢二が、全生涯で人形に執着したことの原点も、ここにあるのではないか、と考えられる。

また、夢二の子供向けの文学や絵画作品には、「人形」という言葉が子供、特に女の子と一緒に出てくる場面がよくある。それは夢二の姉の松香がよく人形で遊んでいたことから想起された可能性も考えられる。夢二の初恋の相手、「みいさん」という女の子に人形が寄り添う思い出も影響を与えたかもしれない。その上、夢二の布への執着も無視してはいけない。彼にとって、布を集め、布を吟味することは生涯の趣味とも言えよう。そのため、夢二が後に自分の手によって、布で人形や人形の衣裳を作るのは、確かに彼の人形と布への愛着の延長線上にあると考えられる。以上のことから、幼年時代に人形芝居や人形の振りで演じる「面浄瑠璃」に親しみ、人形を子供、特に女の子の仲間として見て、そして布に対して特別な愛着を持っている夢二にとって、布を用いて人形を作るようになったのは、必然のようにも思われる。

1930（昭和五）年、夢二は「どんたく社」という人形制作グループを結成し、同年の 2 月 21 日から 23 日まで、銀座の資生堂ギャラリーで、「ゆめ・たけひさ作　どんたく社同人製」と銘打った「雛に寄する展覧会」を開催した。同人には、後に人形作家として重要無形文化財保持者となった堀柳女や、岡山さだみ、檀女礼（ダンメレー）など、人形作家としてはアマチュアの女性たちがいた。彼らは夢二の指導と監督下で、「どんたく人形」と呼ばれる、新聞粘土や古布、針金を素材とする独特な人形を創り出した。その制作方法は、

だれでもすぐ作れるし、形の本体を完成してから、また手を加えて人形劇の一場面のように仕上げることができる。

どんたく社同人はその独特な制作プロセスによって、「感情を表現する」ことに力を入れる。「感情を表現する」方法としては、夢二が提示した「顔を小さく、手足を大きく作る事」と「さかしらな写実は人形を殺す」と心得ること二つある。どんたく社同人の人形は、大きい比率の手足や誇張した手足の動かし方をしている。さらに、どんたく人形は「虚」である誇張する仕草や、不自然な姿勢によって、より人間性を持つ「実」の動きを表現している。その「虚」と「実」と混在する手法で、かえって「実」の世界に収まらない過剰な感情が引き出せるのである。

人形という「生きもの」の世界を作り出すため、「雛に寄する展覧会」でさらに様々な仕掛けが用いられた。特に、作品に人形の本体以外の、何らかの背景や道具が付されていることは、同時代の人形作品から見られない特徴だと堀柳女の文章からわかる。出展作品の題名も、観客の想像力を引き出す重要な役割を担っている。最も注目すべきは、「雛に寄する展覧会」が、制作者が一方的に観客に作品を見せる展覧会ではないということである。観客は夢二らが創り上げた人形の世界を鑑賞し、その世界へ自らも参加しながら自分の感想を絵や文字に転化して会場に残すことができる。人形制作者と観客が、共に、そして互いに残した絵や文字を読み、返事する。「雛に寄する展覧会」そのものが一つの大型の作品で、観客と人形制作者とが一緒に完成させたものである。

このような「雛に寄する展覧会」を日本の人形史においてみると、無視してはいけない存在だと言うべきである。どんたく社とほぼ同じ時期、伝統技法を受け継いだ職人たちが結成した「白澤会」が、人形芸術運動の幕を開けたのは通説であるが、白澤会の最初追い求めたのは、芸術としての人形よりも、装飾を目的とする「鑑賞用」の人形であった。夢二とどんたく社が追い求めた自己表現のための人形とは、目的が随分異なっている。夢二らの自己表現のための人形は、「白澤会」の「鑑賞用」の人形より、本質的に芸術作品に近いのではなかろうか。

それに、人形展覧会を制作者の感情表現の場として開き、さらに観客の参加を求めた「雛に寄する展覧会」は、日本初の試みである。同時代の人形展覧会より一歩進んだだけではなく、観客の参加を求めるという点では、同時代の一般的な絵画などの展覧会よりも、現代的な概念に近いと言っても過言ではないだろう。このように、夢二とどんたく社同人は、人形芸術運動の主流と距離を持っていたものの、「雛に寄する展覧会」が糸口となって、後の日本の人形創作にも繋がってきたと考えられる。

もちろん、夢二が人形制作活動に着手する理由は、意識的に人形界に新たな風を吹かせようとしたことだったわけではないが、彼が人形制作によって、自らの芸術に新境地を開こうとする意欲が見て取れる。夢二は 1989（明治四十二）年、最初の著書で一躍脚光を浴びた以来、絵画だけではなく、異なる芸術形式に挑戦し続けてきた。特に、夢二は自分の作品を二次元的なものに限ってはいないことが窺われる。関東大震災を境に、人気が下降

線をたどった彼は、創作の行き詰まりを打破するため、心の中に潜んでいた人形制作という手段を選んだとも言えよう。立体的な人形を使い、会場を利用し、全体的に劇的な空間を創り上げた「雛に寄する展覧会」は、夢二が自分の才能を最大限に発揮するために最も相応しい表現方式だと考えられる。

「雛に寄する展覧会」が成功を収めた後、夢二は「榛名山美術研究所建設につき」という宣言文を発表した。夢二はこの宣言文で、日用品をつくろうとする「手による産業」を提唱している。「榛名山美術研究所」の建設について、夢二は宣言文を発表しただけで、もし建てるとしたら、どのように運営し、発展するか、と明確に指示していなかった。ただし、「榛名山美術研究所」とどんたく社同人の人形制作活動、両者とも根底には、夢二の生活と芸術を一致させようとの主張と、「手による産業」という理念とで一貫している。夢二が心の中に描いた美術研究所とは、人形制作を出発点とするものではないか、と推察される。様々な原因で研究所計画は中断されたが、夢二が人形制作で美術研究所を建設することに着目したという事実に、意義を認めるべきだと思われる。

展覧会の翌年、夢二は欧米外遊へ出発した。彼は「雛に寄する展覧会」の経験を生かし、アメリカで早くも人形制作に取り組み、カーメルで展覧会を開いたが、一点も売れることがなかった。夢二が欧米に行ったのは、ちょうど世界的な経済不況の時だった。また、当時は国際的な日本人形ブームが起こっていた時期で、伝統的な市松人形と全く異なる夢二の人形は、アメリカ人の、日本人作家の手になる人形に対する期待と全く違うものであったため、彼らに受け入れなかったという可能性が考えられる。それに、当時アメリカで流行っていた欧米の人形は、人間を再現する写実的な傾向が見られるが、夢二の人形は写実的な傾向とは異なる方向を示しているため、夢二の独特な芸術観が感じられない観客にとって、それらの人形はただの粗雑なものだと考えた可能性もある。初めて海外に行った夢二は、異国の人々にとってはただの異邦人である。夢二の作品に触れたことのない観客を即座に人形という「生きもの」の世界の一員として引き込むことは、難しかったのであろう。カーメルでの展覧会の後、夢二が展覧会に自らの作成した人形を出展したという記録は残されていない。その後三年にも及ぶ欧米の旅を終えた夢二は、1933（昭和八）年に日本に帰り、1934（昭和九）年１月に療養所に入院、同年の９月１日に世を去った。

夢二とどんたく社同人との人形制作活動は実際に短い期間だけ続いたが、当時夢二の人形に触れた人々や人形作家たちに、確実に影響を与えた。本論文ではどんたく社同人の三人の、それ以後の人形制作活動を考察した。画家奈知安太郎と結婚した舞踊家檀女礼は、奈知と共同制作で、「童画と人形展」を開いたこともある。岡山さだみは、意識的に夢二の画風を人形によって再現し、夢二から教わった人形制作方法を何十年も続けて人形を作った。また、人形作家として重要無形文化財保持者となった堀柳女は、本格的な人形制作技法を追求し、自分の道を切り開いた。彼女の初期の作品には「どんたく人形」に似ている部分が見られるが、夢二からの影響は次第に薄くなった。ただし、夢二が堀に与えた影響は、人形だけではなく、芸術に対するあらゆる概念に及ぶのである。

若い頃から夢二に私淑してきた中原淳一も、夢二の人形から影響を受けた一人である。淳一は 17 歳に「雛に寄する展覧会」で夢二の人形と出会い、本格的に人形制作に熱中しはじめ、二年後、初の個展「中原淳一のフランス人形」を開催した。淳一はフランス人形で人気を博したが、彼にとって、フランス人形のマスクを使わず作った人形のほうが、本格的な人形であり、より深い趣があり「詩がある」と彼は語っている。「詩がある」という言葉から、彼がその本格的な人形を制作する時、夢二を意識して作ったのではないか、と推測できる。淳一の初期の作品からは、どんたく人形との類似性が見られるが、淳一は写実性を求めるため、夢二の作品と異なる道を歩み始めた。淳一は自分なりの道で、自分の詩情を人形作品によって表わしているとも言えよう。

現代の人形芸術について言及する際に、夢二およびどんたく社同人の名前を挙げている文章は少なくはない。一方で、夢二の人形制作活動と「雛に寄する展覧会」自体について語る論は少ないのである。以上の論述によって、夢二の人形制作活動がわずかな期間だったにもかかわらず、どれほど大きな影響力を持っているか、と考えることができる。